

だいもんじやま 大文字山



京都の夏の夜空を焦がす五山送り火。その一つ、大文字山は京大の目と鼻の先にあるが、あまり登る機会はなく、まるで京都の背景のような存在だ。しかしそこは背景と言うにはもったいないような絶景、さらに歴史と自然を兼ね備えたアトラクションだった。もちろん料金は無料です。 (A-K)



▲大文字山火床からの風景。京大の時計台を正面にして、その向こうに「左大文字」、右手30度に「船形」、60度に「妙」「法」。左手30度に京都御所、60度に岡崎の平安神宮や京都会館。左側いっぱい京都タワーを望むこともできる。

銀閣寺道を東に進み、土産物屋が並ぶ少し急な坂を登ると銀閣寺の入り口。ここを左に折れ、山の方へ進むとアスファルトから砂利の道に変わる。

右手の川は大文字川。左側に中尾城の湧き水を見て、鉄板でできた小さな橋を渡ると砂防ダムが見える。「大文字山→」と書かれた手製の案内板のとおり川を渡ると、いよいよ本格的な山道へ。急な坂を何度も折り返す道を進む。

▶千人塚の石碑。このあたりに送り火に使う薪が置かれている。



気持ちのいい根道をしぼらく進むと小さな広場に出る。ここは「千人塚」と呼ばれ、太平洋戦争中に陸軍が掘ったところ多数の遺骨が出土し、後に供養のために石碑が建てられた場所だ。天文十九年(1549)、足利義輝が京都奪回のための戦で三好長慶に敗れた際、その戦死者を地元の人々が埋葬したのがこの場所だとのこと。登り口の看板に案内がある中尾城はこの戦の義輝側の本拠地となった城だ。

ここから道が分かれていて、左に折れる道とまっすぐに進む道があるが、まっすぐ進む道はわかりづらいので、左の道を進む。道の脇に送り火用の薪が置かれている。ここから少し傾斜がきつくなり、やっと登りきったと思ったら、急な石段がまだその先に続く。下から53段・

45段・47段の階段を登り切ると右手の視界が開ける。ここが大文字の火床、送り火のメインステージだ。ここからは京大はもちろん、晴れて視界のよい日には京都タワーや松ヶ崎の「妙」「法」を望むこともできる。銀閣寺から火床までは30~40分ほどだ。ただし、麓と比べて晴れの日で気温が5℃ほど低くなっているので、しばらくとどまる場合は風邪を引かないように注意しよう。

さて、頂上まではさらに20分ほど道を進むが、火床まで登って下山するのが手軽でおすすだ。

いつも目の前にあってもなかなか登る機会のない大文字山。眺めるだけではなく、暖かくなったこの季節にぜひ一度登ってみたい。

諸説ある 送り火の始まり

京都夏の風物詩、五山送り火。盂蘭盆の最終日に祖先の精霊を送るためのものと言われていますが、その始まりははっきりとわかっていないようで諸説あります。そのいくつかを紹介しましょう。

- (1) 平安初期、大文字山麓の浄土寺が大火に見舞われた際に、本尊・阿弥陀佛が山上に飛翔して光明を放った。この光明を真似て、火を用いる儀式を弘法大師が大の字に改めた。
- (2) 室町中期の延徳元年(1489)、足利義政が近江の合戦で死亡した実子・義尚の冥福を祈るために相国寺の僧侶・横川景三の勧めで始めた。
- (3) 江戸初期の寛文二年(1662)の文献「案内者」の記述に、「大文字は近衛信尹の筆画による」とある。近衛信尹は本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに当代の三筆と言われた能書家。

冬の送り火 消えた送り火

大文字の送り火は夏以外に、明治23年の疎水流通式、同24年のロシア皇太子入洛、同27年の日露戦争勝利の時に点火されています。2000年12月31日に新しい世紀の記念として点火されたことは記憶に新しいでしょう。これとは逆に昭和18年には戦時色が強くなり送り火が中止となりました。この時は早朝に白いシャツを着た市民が火床に並び、送り火ならぬ「大」の人文字を作ったそうです。

はみだし
すてーじ

ちょんまげ占いで「悪徳商人」だったんですが、喜ぶべきですね？
⇒もちろんです。というかむしろうらやましい…

(工・2 病メル雑貨店主)
(自分の言葉ではない編)